ファミリー・アンド・ヒストリー

〔第43回〕

# 看過と過越

文 岩本耕太郎 text by Kotaro Iwamoto

見過ごす訳にはいかないことを看過できないと言いますが、「看過」とは見過ごすとか見逃すという意味です。

沖縄には看過（カンカー）とかシマクサラシと呼ばれる厄除け・厄払いの風習があります。それは家畜の血を家の鴨居や柱に塗り、血に浸した木の枝を軒に挿し、あるいは家畜の骨を村や集落の出入り口の上空に吊るすというものでした。

家畜の骨を縄の中央に縛り、両端は道端の木や電柱に縛りつけたのは、これを簡易鳥居に見立てて集落の境界線を示し、この中に厄が入らないようにという意味だそうです。以前神社の鳥居が紅いのには理由があると書きましたが、まさにこのことだと思います。

日本の風習には動物を生贄にするというものは珍しく、他には諏訪神社で明治時代まで行われていた御頭祭で鹿を生贄にしたものくらいしかないように思います。

この看過の儀式を見たユダヤ人は彼らの古くからの風習である「過越の祭」を連想するようです。過越とは聖書の『出エジプト記』において奴隷となっていたイスラエル人がモーセの指揮のもと、エジプトを脱出する際の話です。その時、全ての家庭の長男が死ぬという災禍がエジプトを襲いましたが、イスラエル人の家庭だけはその災いが「過ぎ越した」というものです。イスラエル人はその災いが来る前に、神の命令によって羊を屠（ほふ）り、その血を家の門口に塗りました。するとその血の塗ってある家庭に対しては裁きの天使が何もせず過ぎ越したというのです。

沖縄では生贄にされたのは牛でしたが、これは日本にはイスラエルのように羊がいなかったからといわれています。共通しているのは、沖縄でもイスラエルでも生贄の動物をその晩に焼いて皆で食べるのです。

さらに、行われる時期も似通っています。沖縄での看過の時期は旧暦の二月初旬といわれており、新暦では3～4月にあたります。一方、過越の祭はユダヤ暦第一月、すなわちニサンの月の14日とされており、太陽暦ではやはり3～4月になるのです。

現代でも過越の祭はペサハと呼ばれていて、この間はキッパという縁なしの帽子をかぶり、酵母で膨らませないマッツァというパンを食べます。キッパは河童、マッツァは餅の語源といわれています。

*profile*
帝国クリニック院長
1959年生まれ。幼少期をボストンで過ごす。
山形大学医学部卒。米国イリノイ州立大学で分子生物学を研究、1993年より現職。
サーフィンとクラッシックカーをこよなく愛し、4世代7人家族。
著書に『患者さまが増える』(H&I出版)、『エグゼクティブが実践するたった一つの健康法』(中経出版)